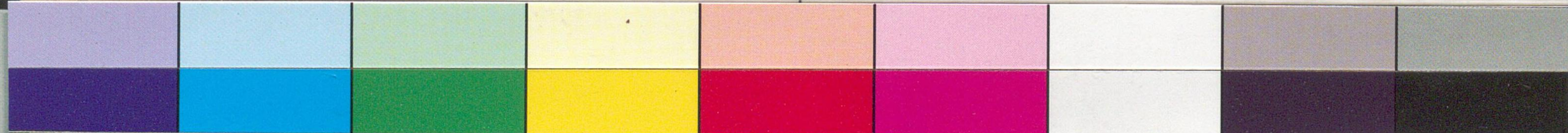


古き外人  
の観たる  
日本國民性

内閣總理大臣 原 敬氏序文  
法學博士 蜷 川 新氏譯



国立国会図書館 渡辺国武関係文書(その2) 1214



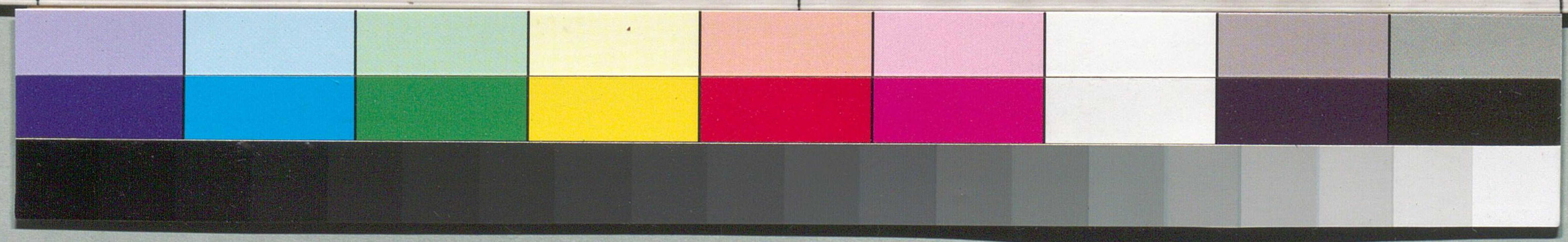
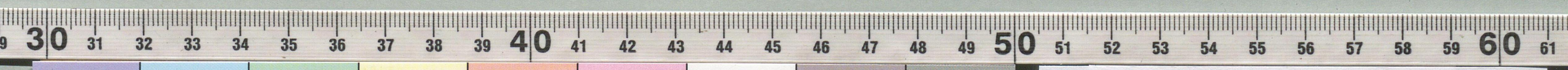
日本國民性

敬氏序文

内閣總理大臣 原 敬氏序文  
法學博士 蜷 川 新氏譯

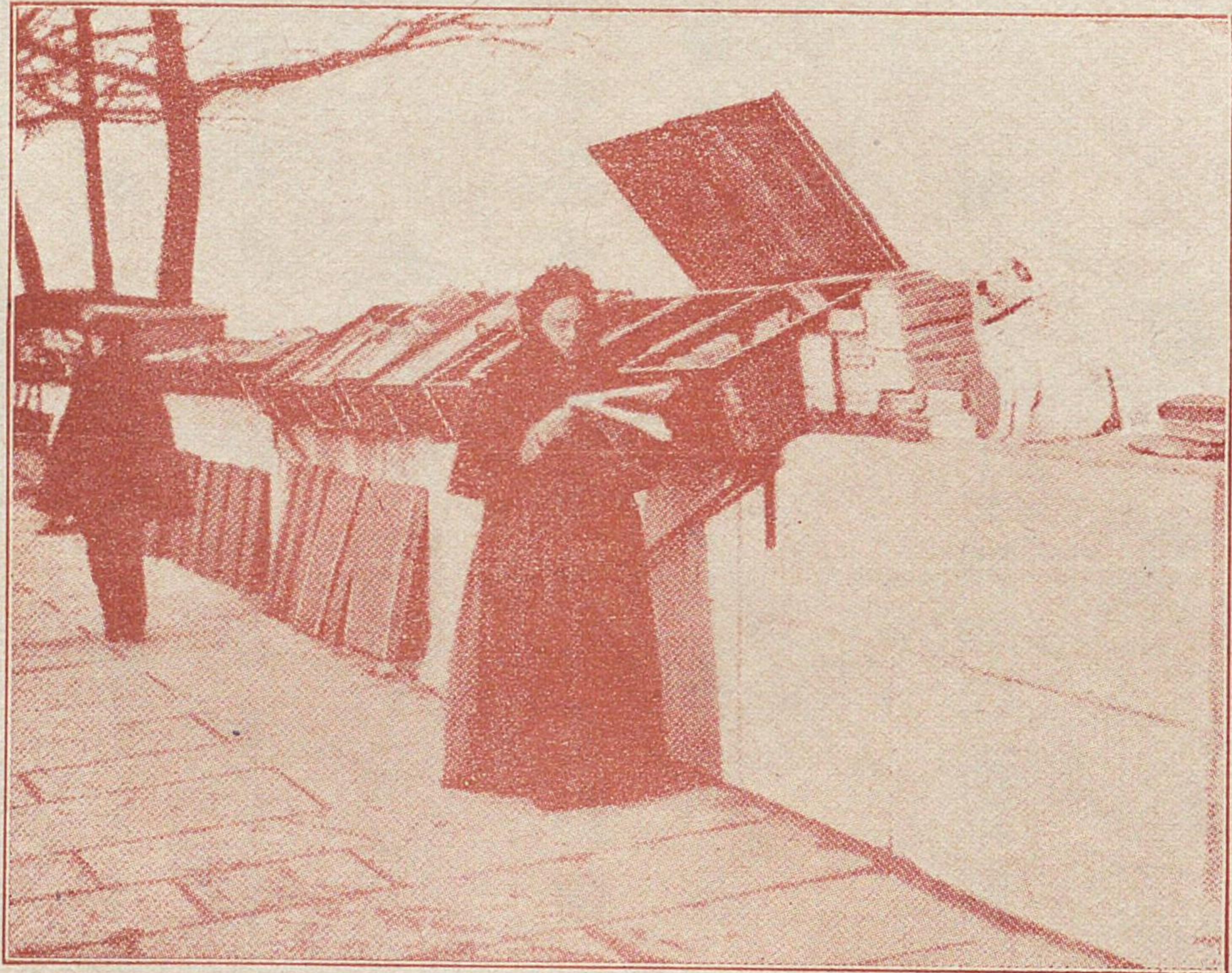
古き外人  
の觀たる  
日本國民性

東京 株式會社 拓殖新報社發行



国立国会図書館 渡辺国武関係文書(その2) 1214





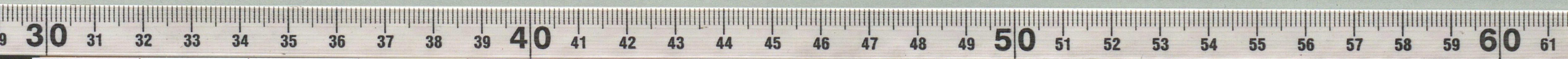
屋本古の畔河ヌーセ

— 照参文序の相首原 —

古の歴史を  
人々の足跡を  
日本国史を  
綴る

東京 総合資料館 庶務課 庶務係

遊學社  
自編  
大正  
三  
年  
文





目次

口 繪——セーヌ河畔の古本屋

序 文

原 敬

本書の來歴と余の所感

渡邊 千 冬

私が本書を翻譯公刊せる理由

蜷 川 新

本書の内容

一、日本人の徳義心……………一七

二、日本人の悪徳……………三三

三、日英兩國民間に存在する相似點……………四三



三、日本文書目録の編纂………  
二、日本人の書………  
一、日本人の書………

本書の自序

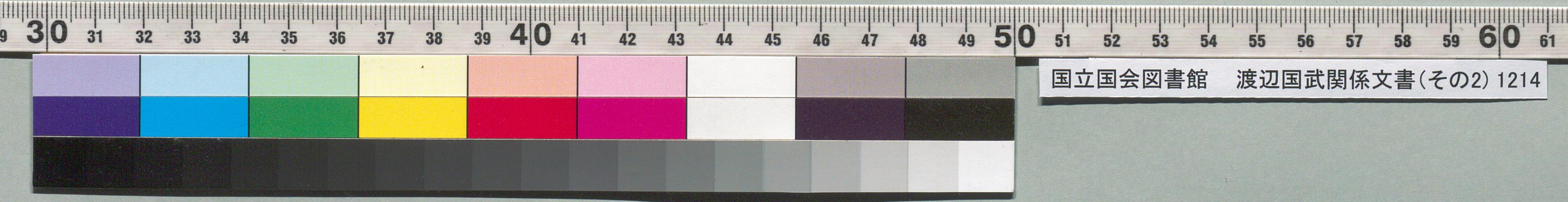
本書の編纂………  
本書の編纂………  
本書の編纂………

目次

序

余が往年巴里に在留中時々セーヌ河畔の古本屋をあさり、人には兎に角、余には珍らしと思ふ古本を買ひ取るを樂しみこせしが、此の原書も即ちその時に得たる古本である。當時之れを閲讀して、無限の興味を覺え、感興最も深かりき。

此の書に掲ぐる日本の國情批判は能く日本人の國民性を是非品騭し、日本人の道義心の高きを





二  
賞揚し、日本人の絶對に平和を愛好する國民なる  
ことを述べたものであるが、洵に是れの確の批評  
である。之れを今日の日本人に對して一部外人  
が好戰的國民の如くに批評するのは、根本に於  
て大なる相違點がある。批評せらるる人も、批評  
する人も共に一世紀半を隔てたる古き時代の人  
であるが故に、かかる相違も當然なりとも言ひ得  
やう。併し乍ら何れの國民にも、一貫したる國民  
性なるものが必ず存在する。此の性格の保持

は各國が各々國民的に誇りとして努むる所であ  
る。日本國民は平和を愛し道義を奉ずるに於て  
終始一貫すべきは勿論であるが、本書は今更の如  
くに此の傳統的國民性を、内國民に傳へ、又外國人  
に知らしむるに於て、大に有益なものと信ずる。

余は本書が渡邊子爵を介して、斯かる問題の研  
究者たる蜷川博士によりて翻譯せられ、世に公に  
せられんとするを悦び、則ち一文を草して所感を  
述べ、之を同君に與へて序となす。



大正十年十月十日

原 敬

四

本書の來歴と余の所感

本年二三月の交、貴族院は、所謂昇格問題が未だ片付かず院内の空氣は緊張し切つて居つて、滿天下の耳目は原首相の一身に集つて居た時であつた。一日余は或る委員會に出席する爲め登院した所、丁度其の日は本會議も無く、院内閑として人影なく、何となく野分の朝を想はしめたのである。然るに不圖見ると、原首相も亦同時に登院せられたのに遭つたので、余は寒暄を叙し長い廊下を閑談を試みながら、一所に歩き始めたのである。首相は政戦は那邊にあり



二  
やといつた風で、書籍の話をして居られたが、突然余に向つて「時に我輩此頃珍らしい古書を匣底に見出した。それは我輩が巴厘に居つた折、古書をあさることを楽しみにして居つたのであるが、その時分セイヌ河畔の書肆で得た書物である。書名は「日本及日本人の批評的及び哲學的觀察」といふのであつて、其の奇なるは佛文を以て叙述してあるに拘らず、蘭人の著であるが如く察せられ且つ著者が無名であつて、アムステルダム及び巴厘で刊行せられた事である。我國民を不遠慮に批評して居るが、中々肯綮に當つて居る所がある。議會でも濟んだら一讀して見てはどうか」と

言はれたので、余は一方には、原首相の餘裕綽々たるに敬服し、他方には、此の奇書を繙く事を楽しみにしながら、其の好意を感謝して、其の日は首相に別れたのであつた。

その後、余は本年四月九州に旅行したのであるが、其の時のこの首相の話された書物は、余の旅囊の中に收められた。汽車、汽船の上、旅館孤燈の下に、常に旅行の好伴侶であつた。長崎では港に出入する汽船をホテルの窓から見下しながら、出島で蘭人と貿易をした時代を腦中に描出し、それより三角に渡らんとして、島原まで行つて、風の爲めに船が出ぬので汽車で引返す迄の間、寂しき町を一巡しながら、我邦の



耶蘇教と葡萄牙人及び蘭人との奇しき因縁を想起し、南下して、鹿兒島に行くと、そこには天文十八年フランソワ、ザビエが、始めて來朝した紀念の會堂があり、それを見ては、轉た時運の悠久なるに驚き、又別府の共進會に大友宗麟の巨像を見ては、鹿兒島より二年後れて天文二十年に、フランソワ、ザビエが、始めて別府に來た事や、別府灣が當時九州第一の貿易港たりしこと、一代の英雄兒が晩年志を失し耶蘇教に歸依し、フランソワと改名し、豫言者エリーの如くに死せるに對し、一掬同情の涙を濺いたのであるが、其間首相より借りたこの書物は、常に余の手中にあつたのである。余は九

四

州の政治史、文明史と葡萄牙人、和蘭人との最も密接なる關係に盡きぬ感興を催しながら、此の書を讀了したのである。歸來丁度親友蜷川新君と會合したので、學者たる氏が、必ずや、此書に興味を持つてあらうと思つて、余の感想を述べた所、氏は是非一讀したいとのことであつた。果せる哉氏は一讀して自分獨り此の興味を私することは、誠に惜しいことである。抄譯して世人に示したいと言はれたので、直ちに其の旨を首相に話をし、首相も快諾され、遂に出來上つたのが此の一書である。

此の書は、決して、外人が日本の事を記述した最古の書物

五



ではない。此の書の出版されたのは今より百四十一年前  
西暦一七八〇年で、我が邦では、十代將軍家治の治世である  
安永の末年に當つて居る。即ち比較的近代である。日本  
人に普く知られて居る佛人クラッセーの日本西教史や、蘭  
人ケンペルの日本史などに比すると出版が後れて居る。  
然し後れて居る丈、此の書物の骨董的價值は減ずるかも知  
れないが、内容的價值は多い譯である。即ち近頃の歐洲人  
が、日本人に對して抱く感想と、より密接なる關係があるの  
である。又反對に見て、西洋人が日本人の國民心理を研究  
するに當り、その同胞が未だ西洋文明を以て假裝せられざ

る無垢な鎖國時代終期の日本を、如何に見たかを知るのは、  
最も興味ある事であらうと思ふ。

又此の書物は評論を主としたもので、事實は之れを第二  
に置いてある。事實の記載は、結論を證據立てる爲めに、引  
用したものであると見るのが穩當である。即ち此の書物  
はクラッセーやケンペルの著書に比すれば、日本の歴史の  
参考材料たる性質に於て幾分缺けて居るかも知れない。  
然し我々が西洋人から聞きたいのは、日本の歴史ではない、  
日本の歴史に付ては西洋人より日本人の方が能く知つて  
居る。我々の知りたいのは日本人より西洋人が能く知つ



て居る西洋人の感想そのものである。この感想を記述したのが、即ち此の書物である。之れ此の書物の興味多き所以である。

余は蜷川君が此の書物を公にするに至つた來歴を述べ、余の此の書物に對する所感を述べることを、最も愉快なる義務であると信ずる。

大正十年十月

子爵 渡邊 千冬

### 私か本書を翻譯公刊せる理由

今日の西洋人の中には、日本人を以て、平和愛好の國民にあらざるが如き批評をなすものが甚だ多い。

この批評は我等より見れば全く見當違ひである。然り、而してこの見當違ひの批評は、必らず之を正さしむるを要する。

然らば如何にせば即ち可ならんか。私は三百年の遠き昔より、我日本國民を仔細に諒解しつつある和蘭國民中の或る學者の古書に依り、日本の眞の國民性の如何なるもの



であるかを、今日の友邦國民に知らしむることは、即ち右の  
目的を達するが爲めに適當なる一方法であると信ずるも  
のである。何んとなれば、是れ偽りなき一外人の告白であ  
るからである。

私が今抄譯せる所は、この主旨を以てせるものであつて、  
原書は今を去ること實に一百四十一年前、巴里及アムステ  
ルダムに於て出版せられたる匿名一蘭人の佛文を以ても  
のせる珍書である。

當時の蘭人は、如何に日本國民を観察したりしものであ  
つたらうか。彼等が日本人を以て、平和愛好の純良なる國

民なりと斷定せる所は、今の日本人をして、眞に世界に知己  
ありの感を懐かしめる。

蘭人の見たる古の日本人は、實に善良溫順なる人民であ  
つた。然るに今日の日本人は、輕薄にして詐欺的に、而も好  
戰的の國民の如くに、外人よりして批評せられてゐるので  
ある。私はこの翻譯を爲して以て、一には此の謬見を有す  
る外國人等をして反省せしめ、又二には餘りに物質主義に  
走り過ぎたる日本人其人をして大に自ら反省せしめ、日本  
人をして益々君子國民たらしめ、國際の平和を確保せんこ  
とを希ふものである。



二二  
今や蘭國政府は、今日の日本の言論界の状況を詳細に其本國に傳ふるがために、特にファン・デスタット氏を日本に派遣せらるゝ事となつた。私は日本人が其の舊き友たる蘭人に對する友情の、油然として永遠に持續せられ、依然として蘭人より同情を以て眺められ、兩國民のために、安寧の保障せられ幸福の増進せられんことを希ひ、本書がこの兩國民結合のために、有益の材料となり得んことを、衷心より祈つて已まざる者である。

大正十年十月上浣

法學博士 蜷 川 新

### 本原書の内容

本原書は、原名を *Observation critique et philosophique sur le Japon et les Japonais. 1780* 「日本及日本人に對する批評的哲學的觀察」と題し、一小冊子であるが、細字にて二百六十六頁ある。今其目次を示せば即ち左の如し。

- 一、日本政府の性質
- 二、皇帝及帝國の勢力と富力
- 三、日本の産物
- 四、日本の農業及商業



五、日本に於ける衣裝、婚姻及教育

六、日本人の諸習慣

七、同

八、日本人の娛樂

九、日本人の徳義

十、日本人の惡徳

十一、日本人の宗教

十二、日本の神に關する特殊の觀察

十三、内裏即ち日本人の教義上の主權者

十四、日本人と英國人との相似點

本書は匿名にして、其何人の著作なるやを知ることを得ない。併し乍ら其序文と發行の場所との關係により之れを察すれば、和蘭人の著はせるものなることを推測し得る。私は和蘭人數氏に付、本書が何人に依りて誌されたるものなるかを訊ねたのであるけれども、何れも即座には、此古書の存在をさへ知らなかつたのである。けれども友人たる蘭人某氏の調査の結果、古き一蘭人宣教師の著作であることが判明したのであつた。

本書はまことに珍らしい古書である。文體も文字も、何れも共にその時代風である。此珍書が日本に存在するこ



は頗る面白く、殊に日本の大政治家原敬氏の手に藏せらるることに至つて、一層の興味がある。けれども私は今この書の全部を譯出することの必要を認めない。即ち私の最も必要なりと考ふる所の、「日本人の徳義」「日本人の悪徳」及「日本人と英國人との間の相似點」の三章のみを譯述したのである。

當時の蘭人の眼には、既に日英人の相似點が映じたのである。日英同盟が其の後兩國民の間に成立し、よく東洋の平和を維持し得た事も、決して偶然の事にあらざるを察知し得可きである。

## 古き外人の觀たる日本國民性

法學博士 蜷 川 新 抄 譯

### 日本人の徳義心

日本人は名譽を重んずる國民である。彼等は然諾を重んじ信を人に失せんよりは寧ろ死を撰ぶを常とし、友義に反せざらんが爲めに總ての苦楚に堪へ、累を共謀者に及ぼさざらんが爲め事件の秘密は往々沈黙と共に墓中に葬られる風がある。日本人は主權者を尊重し、彼等は政府に對



して苦情を述べず總ての階級を通じて法律に従順である  
而して其の法律たるや峻嚴なるものである。

凡ての歴史家は日本人を評して節制、忍耐、慈惠心に富める國民と云つて居る、是れが日本國民の道德である、日本人は他人より迫害を受くるも容易に之に對して怒ると言ふことをしない、若しも下級者より危害を被り、然も復讐せざるべからざる場合に於ても、法律の許したる權力を以て之を行ふのみにして、決して其の以外に出でない、復讐を爲すに就ても國民の或る一團を捕へて、之を罰するが如き非道の事を爲さない、然して争闘に付ては、甚だ放恣なる國民で

あるけれども、名譽の原則を以て、法律を導奉する、日本人位名譽を重んずる國民は他に之を見られない、彼等は其の怒りを蔭す、然し這は卑怯の爲めではない、彼等は憤怒の發するに委して行動するは罪惡だと考へて居る、日本人は他人より受けたる危害を加害者に復讐するに付ては如何にせば適當なるかを其の心の中に考へる、而して些細の事に付ては怒りに任せて事を爲すは賢者の爲す所にあらずとの確言に従ひて行動する、日本人の間には階級は明白に別れて居る、大名は普通の士及農工商の上に位して居る、而して自己の尊敬されん事を要求する。而して平民は武家の



階級を買ふ事は出来ない、各人は各々其所に居る、日本に於ては兵士は重要な職務を行ふものであつて、往々にして、其の能力に従ひ高位置に昇る、婦人の力によりて引上げられると云ふ如き歐洲に見るが如き見憎きものはない。

余は佛人シャル・ヴォア氏が日本人を以て「亞細亞人の英人也」と稱し、斯くして以て英人を誹謗せんとしたるや否やを知らざれども、兩國国民共に、自殺を容易に行ふ風がある。

英國に於ては、其の自殺は、尊大の舉動とか、憂鬱とか、憔悴とかより生ずるけれども、日本に於ては、反省の結果之れを行ふのである、日本人は道理の壓迫を受けての後にあらざれば

ば自殺するものはない、日本人は生きて恥を曝さんよりも死を撰ぶと言ふにある、此事は常に残忍の事なるに相違ない、乍併英人の死に比すれば非難すべきもの少いのである、自然は生育すべきものであつて、破壊すべきものではない、余は自殺は一の犯罪なるを知つて居る、乍併日本人の爲す所には過失にせよ道理の存在するを以て、英人に比すれば恕せざるべからざるものである、日本の宗教の中には、自殺を禁ずる條規はない、英國人の宗教の中には、之れに反して此の規定がある、然るに英人は失敗の爲めに、或は恐怖の爲めに、ピストルを以て自殺し、或は毒を仰いて死し、或は短劍



又は繩を以て死す、若しも名譽なるものは死よりも尊しとせば、名譽を毀損するもの生じたる場合には、死を擇むは犯罪にあらざ、これ日本人の爲す所である、然るに英人は基督教徒であるが故に、日本人の如き主張を爲す事は出来ない。日本人は英雄的である、凡ての歴史家は皆かく述べて居る。

三三

生を愛するの情は、日本人と雖も歐洲人と變る事はない。乍併日本に於ては、英雄的の感念が西洋に於けるものよりも一層輝いて居る。

市民間の結合一致と言ふものは今日に於ては稀れである、同一市内の人々の集合する時は互に排擠し嫉妬するのみ也とは人の云ふ所であつて、歐洲に於て此事一般に行はるゝ風である、外面には親切丁寧の風あれども、内心は相嫉視するものである事は事實である、極めて小範圍の社會に於て、相互に心と心とを相開いて交際せざるべからざる會合に於てすらも、尙ほ嫉視反目行はれ、歡樂と言ふよりも、利益のみを以て集合せられて居る、何れの會合に於ても、不信の空氣は充實して居る、夫れにも拘らず、或は虛榮心を以て、或は恐慌心を以て、集會を爲すの風を維持して居る、日本人は之れに反して、心底より社交的であり、食事の際に於ても、

三三



二四  
訪問の際に於ても、集會の場合に於ても、利害關係の問題を論じて少しも差支ない有様である、日本人は相互に嫉視する所なきを以て、難問も容易に解決せられ了るのである、日本人の前には、公の利益が常に勝利者であつて、箇人の利益は常に犠牲に供せられる、此の精神あるが故に、寛容の徳生じ、國家の繁榮を來す、日本には幾多の宗教上の分派がある、しかも其の道德其の教理は互に全然反對のものもあるが、宗派の相異の故を以て豪族等と卑賤民との間に怨嗟を生じたることなく、歐洲に於ける如き、血を流して争を生じたりし事もない。

一般に言ふ時は、豪族に特殊の宗派なるものなきも、彼等は總ての宗派を尊敬して居る。豪族の考へにては宗教は人民をして義務心を起さすのに必要なものであるとせられて居る。

日本の豪族は、宗教者の爲すに委して居る、之に關して、佛人シャルル・ヴオア氏は、是れ偽善にあらずして秩序を愛する爲めである。人民の道德心を維持せしむる爲めに、必要也として彼等の信ずる所であり其の人民をして憤怒せしめぬが爲めである」と解釋して居るが、讀者は、日本人の間に此の寛容なる事實あるに拘らず、日本人が基督教徒を殺戮



したるの事實ありしを不可解とするであらう、然れども基督教徒を逐へるは、彼等の國より見れば、是れ國家政策の爲めに斯くせざるべからざりしものであつて、宗教上の問題ではなかつたのである。日本人は基督教徒を目して、野心満々たる西班牙の爪牙也となせしものにして、西班牙人は基督教徒を日本に入れて以て、日本を西國の屬領となさんと企てしもの也と考へたのである。

日本の如き有禮にして有徳なる國民の中には親子の愛情の高く優しきものあるを認めざるを得ない、子供の成年に達するや、日本に於ては、父は其の地位を去り之れを其子

に譲り、其の財産も亦之れを其の子に與へ、親は之れより其子の賓客となるのである、然かも日本に於ては、其の子供より見棄てられたる兩親を見た事はないのである、而して子は其の親を養はざる可らずとの八釜しき法律があるのではない、又夫が其妻の爲めに夫の死後與ふべき財産に付ては法律に定めてはない、日本の土地には子として親を棄てると云ふ如き不孝者は決してないのである、歐洲に於ても此事ありと云ひ得るであらうか、日本に於ける孝子の實例多々ある中に於て、左の一例を掲げて見よう、是れシャルヴオア氏の書物を讀みし人の屢試むる所である。



二八  
「二人の女あり、寡婦にして三人の子と同居して居つた、四人は共に稼いで居つた、三人の子は其の一家を支へるに足るべき充分の賃金を得る能はざる所より、其の母を安心せしめんが爲めに、異常の決心を爲した、當時公儀よりの發表によると、盜賊を捉へて之れを裁判所に引渡したる時は、褒美としてかなりの大金を與ふと云ふ事であつた、三人は之れを聞き込み、其の母を其貧より救ふが爲めに、一人を盜賊と見做し、他の二人は之れを捕へて裁判所に伴れ行くべしと云ふ事に協議を定め、三人は籤を抽き、犠牲者を定めた、然る所籤は最も年少き弟に當りしを以て、二人の兄は此の弟

を縛して、之れを罪人として裁判所に送つた、裁判官は審問を爲し此の少年に問ふた所が、少年は私は盜賊を働きましたと答へた、其所で之を牢屋に送つた、弟を引渡したる兄は約束の金を得たが兄二人は弟の身の上を心配するに至つた、兄二人は即ち牢獄に忍び入り弟を抱いて泣いた。裁判官は偶然此の事を見附けて此の新しき事態に付て非常に驚き、即ち其の配下の一人を喚び、二人の告訴人を追跡せしめ、之れを見失はざる様にし、如何にかして此の不思議の事情を承知せしむる事とした、裁判官の家來は其の命の如くに働き、而して報告して曰ふには「二人は同一の家に入つ



た、家來は其家に近寄り、彼等が其母に對して爲せる話を立  
聞した所が、母は之れを聞いて、悲歎の餘り聲を上げて叫び、  
二人に命ずるに、持來れる金を役人に返還すべき事を以て  
し、且つ云ふには、自分は其の子の生命を犠牲にして其の生  
を保たんよりは、寧ろ饑の爲めに死んだ方が好い」と裁判  
官は之を聞きサテコソ了解したりとて、大に驚き、入牢者を  
喚出さしめ、種々訊問し、何故に斯る企を爲せしかを問ふた、  
入牢せる若者は一切を自白した。

茲に於てか裁判官は彼れを懇諭したる後、公方様（原書  
に斯く書いてある）に此事を上申した所が、公方様は其の  
子供の勇敢なる行動を嘉みせられ、三人の子供を引見せら  
れて、最も年若き子供に一千五百兩又二人の子に五百兩の  
年金を賜つた。

歐洲に果して如斯事例ありや、余は日本人の孝心を尊敬  
するのである。

日本人の商人に、信義の存する事は確實である、余は蘭人  
が日本人と正規の商業を行ふものであるが故に、特に之を  
和蘭人に云ふのである、日本人の如き忠實なる商人は世界  
何れの處にも之を見ない。日本人は外人に對し親切であ  
り柔和である。其外日本人は世界の各國民の有する美德



は悉く之れを具へて居るのである、有徳者は此の島人を嘆美するであらう、罪あるものは余の語るところに反省するであらう、彼等を模倣するのは幸である。

三三

## 二、日本人の悪徳

何れの國民にも缺點の無いものはない、之れ自然の氣候より來るものである、北方の人民は飲酒に耽り、南方の民は遊惰である、日本人にも缺點はある、日本人は傲慢で、復讐心に強く、非常に淫靡であり、世界の他の民族を敵也と宣言して居る。

日本人の傲慢心は、往々にして馬鹿々々しき自尊となつて居る、但し支那人程に甚しくはない、下級の兵士と雖も商人と親交するを欲しない、軍人たる事は最も高尚なる職業

三三



三十四  
だと彼等は思つて居る、卑賤の人に至る迄も、尊大の様子をして居る、好く此點は西班牙人の尊大なる所に似て居る、元來倨傲なる人々には心實の賤しきもの多く、謙遜なる人に偉大なる人多きは一般である、乍併日本人には斯る事が見られない、日本人は尊大である、何となれば、日本人は斯くする事が名譽の一端也と信じて居るからである。

日本人が外國人を嫌忌するに至りし理由は、實に西班牙人が、日本人の中に入り込み、其の商業を盛大にし、日本人を制馭せんと欲したしりを怒りしが爲めである、日本人は歐洲人が何事かを企てんとするの態度を見て、猜忌的となつ

たのである、又何人と雖葡萄牙人の試みたる陰謀を知らな  
いものはない、葡萄牙人は、日本の諸侯の間に巧妙に不和の  
種子を撒いた、然し乍ら、日本人は歐洲の他の國民に其の門  
戸を閉づる事なくして、西班牙人の陰謀を抑壓する事が出  
來なかつたのであらうか、世界との貿易を中止して、自己に  
不利益を來すが如きを爲さざるべからざりしものであつ  
たらうか、當時墨西哥人や秘露人は、日本人と貿易を營み日  
本人をして利益を得せしめ得る事情があつたのである、日  
本人は賢明なる政治的警戒の下に歐洲人と商業を繼續し  
つゝ、西班牙人の野望を排除する事を得たのであつた、若し



宗教の宣布を禁じたならば、敵をして其の施すなきの術なからしめたのであつた、日本人は此の程度に止め、通商を續行し、其の國を富ますべきであつた、歐洲の明敏なる他の國民は、日本の資源を研究し、之れを歐洲品と交易するに依つて、其の富を増加し得べく、決して、此の親切淡白の日本國民に對して、其の宗教を強ゆるが如き事はなかつたであらう、然るに日本人は、終に日本に於て自給すと宣言するに至つた、日本人は決して海外との交通に依りて得べき無限の富源開發の利を失ふ事を知らないのではなかつたのである、即ち日本人は和蘭人を歓迎した、乍併、他國民をして競争せ

しむる事なからしめしを以て、日本人は和蘭人との貿易に依りて、多大の利益を收むるは不可能であつた、日本人は蘭人との通商に付て、餘りに用意深く制限を爲せしが爲めに、利益を得ることは少かつた、日本人は、貿易を寛大にしなかつた、而して外國人に對する壓迫は激しかつた、支那人に對しても同様であつた。

多くの歴史家の言ふが如くに、余は日本人は甚しく復讐的の人民なるやを知らない、日本人は憎惡の情を抑へる事を知つて居る、復讐するにしても高尚に此事を行ふ、日本人は敵に復仇し、又は敵を恥しむる爲めに、敵の弱點を利用す



ると云ふが如きを決して爲ない、憎悪の念を抑壓するには決して卑怯の心から來るのではない、日本人は其の感情の走るに委すると云ふ事なく、到る所に秩序を立てん事を欲する國民である、日本人は若し對者にして、正しき辯明を爲すならば、其の感情を和げる、乍併若しも名譽を毀損せられたる場合には、敵を寛容する事はない、日本人には何よりも名譽が大切であつて、若し敵が卑怯な事を爲して哀を乞ふが如き事があつたならば、二重に名譽を傷けられたるものと考へるのである。

日本人は憎悪の感情を持つ事稀である、人を惡むの性僻を有して居ない、但し蠻的の歡樂に付ては別物であつて、之れは日本人の間に行はれて居る、併し歐洲に見るが如く情交又は性的快樂の結果殘酷の事を爲すことはない、日本の女は、西洋の男を愛しないからして此の害毒に侵さるゝことはない。

日本人は外人を輕蔑する、併し此の輕侮は歐洲國民同士の間にもある、顧みて我々は如何である、我々が野蠻人と通商して我々を利せんが爲めに彼等を略奪し我々の玩弄物と爲さんが爲めに彼等を腐敗せしむるは彼等野蠻人を尊敬するが爲めであらうか、遠き外國は別とし歐洲内に於て



四〇  
は如何、例は英人は佛人に對して何と言ふか。又佛人は英人に對し、獨人は西班牙人に對し、西班牙人は伊太利人に對して、何と批評するか、又王國の民は共和國の人を惡口し、著書に於ては、國民相互に褒むるを爲して居るも、實際に於ては、輕蔑したり憎惡したりして居る、日本人が外人を憎惡するに至りしは、西班牙人に企てたる陰謀の露顯して以來の事である、支那人は外人を無智なりと信じ新來者として喜ぶ、日本人は四面に大海を環らし、其中に自給し居るを以て、外人を知らず、之れを憎惡する、併し日本人は外國人が勤勉であり智力あるを好く解して居る、乍併外人の天才や富力

を自由に收めんとはせずして、一島國に閉居し自給自足して居る、而して公使を外國に送らない、外國人より之を見れば、恰も無禮の國民の様に見へるけれども、彼等自身より云へば、之れは其の政策である。

日本に於て甚しき惡習慣がある、其れは其の子を養ふ能はざるものは、之を殺し得と云ふことである、此の習慣は古より日本にある、貧人は或は其の子を道に棄てたり、或は之を賣つたりすることも行はれた、又多くの妾を蓄へると云ふ惡風もある、日本人が其の子を殺し、其貧を救はんとする事の風習は甚だ悪い、乍併歐洲に於ても、子供を多く産む事



は、其の財産を小さく分配するの結果となる事を恐れ、人工的に出産を制限し、夫婦の契合の神聖を破るの風あるは悪事である。

四三

### 三、日英兩國民の間に存在する相似點

英人は悪徳よりも道義の觀念を多く有して居り、英雄的である、日本人は中庸の道徳を知らずして、無制限に堅實であり、寛大であり、友情的である、英人は淡泊であり寛大である、然れ共、日本人に比すれば稍や自己の利益に重きを置く傾がある、公共の幸福、自由の愛と云ふ如き觀念は、英人には甚だ強い、日本人は之れに對しては、名譽と云ふを主となして居る、兩國民共に宗教上の信念は變じ易い。日本人は宗教に付て無關心なりと云ひ、英人は心の中に信仰せざる

四三



を唯だ外面に尊敬して居る、日本人は基督教を國外に逐ふた、英人は加特教を英國より逐ふた、兩者共に、宗教は西班牙の配下に國家を置かんとするの方便なることを恐れたのであつた、兩國民共に、此の暴行を敢てしたのであつた。乍併此點に付て、日本人は英人よりも其の罪は輕いのである、何となれば、英人は回教徒の犯せし濫用を除き去ることが出來得たのであるからである、英國に於ては、此國に基督教の行はれし初より宗教者の誤謬はあつたのである。乍併日本に於ては、基督教の入りし當時に於ては、何等之れに付ての智識はなかりしものであつて、聖書が地上の王に對して服

従を要求するもの也と云ふ如きことを知らず、又日本に於ては、基督教の道德と、西班牙王の密使の政略とは、一致せざるゝなどは、話されなかつたのである。日本人は基督教を以て、外國の隷屬下に日本を置かんとするもの也と信じたのであつて、又斯く信ぜざるを得なかつたのである。何となれば、日本政府をして基督教排斥の政策を取るに至らしめたものは、西班牙王の側よりして、歐洲の最上主權を日本政府をして認めしめんと企てた事が原因であるからである。日本政府の行動は正しかつたと評せざるを得ない。

日本人は、巧緻で、勤勉で、活動的で、而して用意周到である。



彼等は總ての事業の完成を欲する、彼等の手になる仕事は完璧である、英人は事業を發明し、之れを巧妙精緻に完成する。英人の貿易は廣く行はれて居る、英人は世界を航海して半球を變化せしめた、英人は死を怖れずして、海上に暴風と戦ひ、又方陣を作つて敵軍を悩ました、英人は榮譽の爲め利益の爲めには生命をも惜しまない。

日本人は温順を愛し、英人は異常を好む。日本人は平和享樂の生活を爲すを專一とし、其の知識を進むるを従として居る、英人は研究に熱中し、官能の満足よりも精神の満足を悦んで居る。兩者共に其の感情は鋭く、其の快樂を得る。

事には中庸を外れて居る。日本人は歡樂的に生れて居り、英人は外國との貿易を欲するより歡樂の民となつた。日本人の間には、穩和なる所あれども、英人の中には、熱狂がある。

清潔も亦兩國民に共通である。節制は日本人の特色である、警官は英國に於ては、賢明であり且つ物の道理に通じて居り、日本に於ては峻嚴である。又人民は之れに従順である、日本に於ては調書を作る事なく、又は極く僅かに作るが、英國にては手續が錯雜して居る。

日本人は其の國情、其の商業、其の富に付て、矜つて居り、世



界から獨立したものだと自信して居る。英人は其の隣國民を羨望することがない、夫故に若しも他國侵略の慾望なかりしものとせば、其の國內に閉居したであらう。英人は重税に苦しめられ、國內の不和に弱められ、壓制政治に反抗し、海外に出動する國民精神を更らに新に實現するより外に其の國を救ふの途はないのである。日本人は國內平和を愛し、其國を防衛する以外に、何者も求むる所はないのである、日本人は國內の事物を以て満足して居る。

日本に於ける名譽と云ふ觀念は、英人が大憲章を守るに熱心なると同一である。自殺は日本人の間には反省の結

果である。英人の自殺は斯る褒むべきものではない、日本人は或る大なる精神を以て、敵に復讐するけれども、英人はさうでない、若し日英兩國民を其の性質の相似點に付て求めて見るならば、そは互に人道の權利より形成せらるゝ高尚の思想と云ふ事である。

日本人は抽象的の科學に付て好みがない。英人は世界の中に於て、抽象的科學を修養したる點に於ては無比の國民である。英人は織巧と云ふ事に付て缺けたる點があるけれども堅牢と云ふ特質がある。日本人は讀書し記述することを好む、日本人にして若しも科學の價値を知了した



五〇  
ならば、東西兩半球の凡ての學者を超越するであらう。  
ジェス井ツト派に屬する人は蘭人に對して、蘭人は日本  
の國王に勧め、日本より基督教を追放せしめたるもの也と  
稱して、蘭人を誹謗したりし事は、何人も知らぬものはない  
であらう。彼等は踏繪を以て蘭人の創案なりとし、和蘭人  
を悪罵し、蘭人は公方様の殿中に於て、玩具又は道化師の如  
くに奉侍するの條件に依りて、通商を許されたるものなり  
と云つて居る。

余は高明正大の事を爲せる蘭人の事は、既に世に明かな  
るを以て、茲に辯護しまい。併し蘭人に對する悪口を記し

たる書物に付ては、反省するを怠らない。  
若しも蘭人にして西班牙人の陰謀を摘發し、之れが爲め  
に日本よりして基督教徒放逐の事を日本の大君をして實  
行せしむるに到りしものならば、蘭人は今日よりも更らに  
大なる自由を得たであらう。何んとなれば、是れ日本を救  
へる一大事業であるからである。然るに和蘭は果して如  
何なる報酬をば得たりしか、和蘭人に比すれば、葡萄牙人は  
從來多くの利益を得つゝありしものであつて、此の蘭人は、  
徳川幕府に密告するに、宣教師等は西班牙王朝の爲めに使  
役せらるゝ間諜也と云ふを以てした。即ち蘭人が爲せ



しにあらざして葡人の爲せる行爲であつたのである。若しも和蘭人が此事を告げたのであつたならば、日本の大君は、通商を禁止するが如きことなく、却つて蘭人の正直を愛し蘭人の欲するが如き自由を蘭人に與へたであらう。

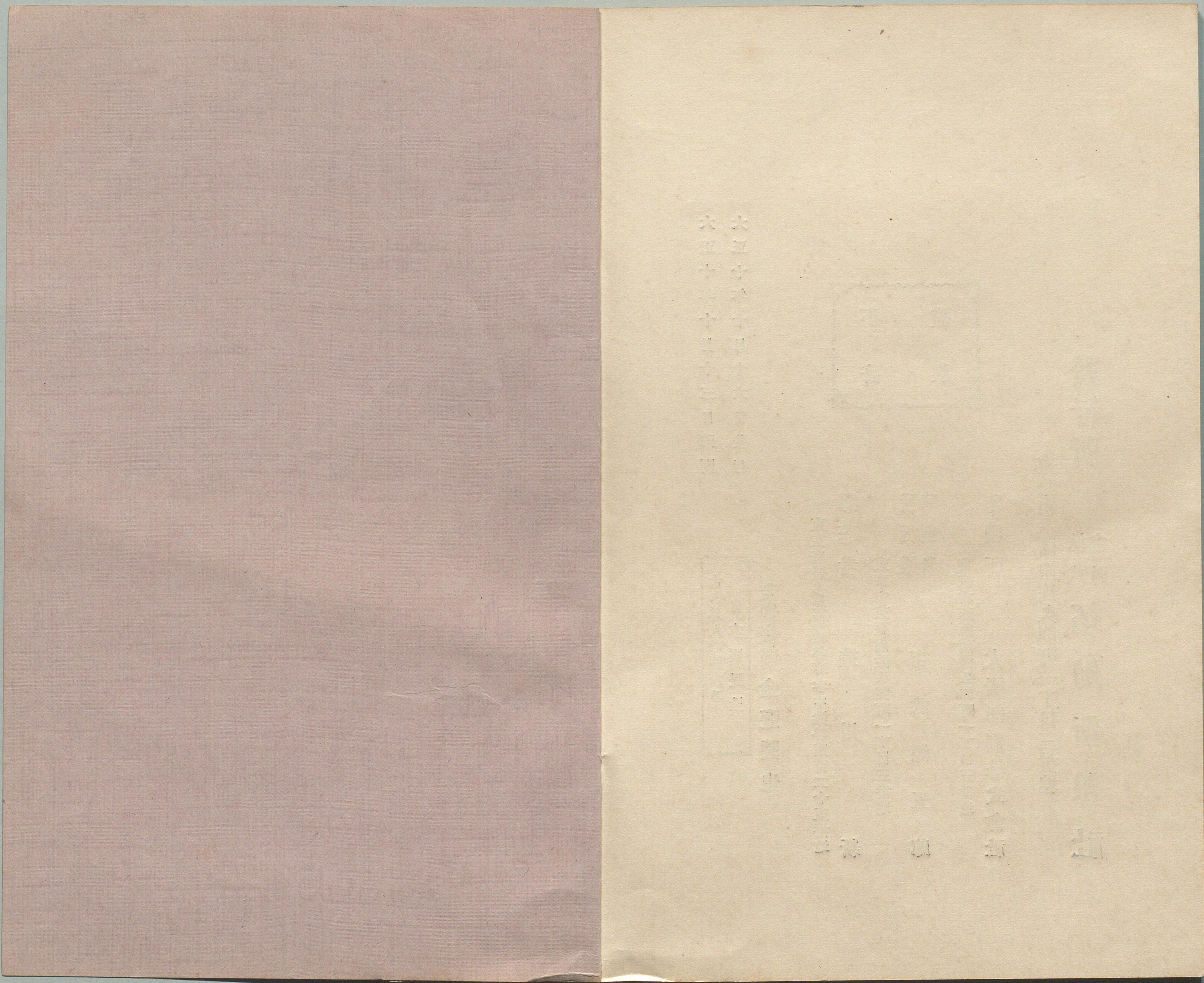
葡人等は蘭人に對して、江戸幕府の禮式に従ひて之れを行へるは、一つの罪惡であると云つて居る。而して蘭人の日本政府に對する従順を以て、卑怯也と評して居る。然し乍ら、亞細亞の君主は、外國の公使に對して、非常なる敬禮を君主に捧ぐるを要求して居り、而して外國の禮式は、歐洲の方式とは甚だしく異つて居るのである。國君が其の面前

に於て、外國使臣の隨員をして舞踊せしむる時には、其の外國の風習を知ることを欲するのであり、其の臣下は之れを見て大に悅服するのである、和蘭人は之れに付ては、別に不思議なことをした譯ではない。斯る事を以て、葡人は蘭人を誹謗したのである、日本人は諧謔じみた事を好む人民ではない。公方様が蘭人に賜はる贈物は、立派なものであつて決して蘭人を輕蔑した如き風のものではない。若しも蘭人を以て、幫間の如くに考へるならば、日本政府は、長崎に於て、蘭人の苦痛を輕減するが爲めに、特に親切なる取扱を爲す理由はない筈である。日本の君主が、外國の贈物を受納



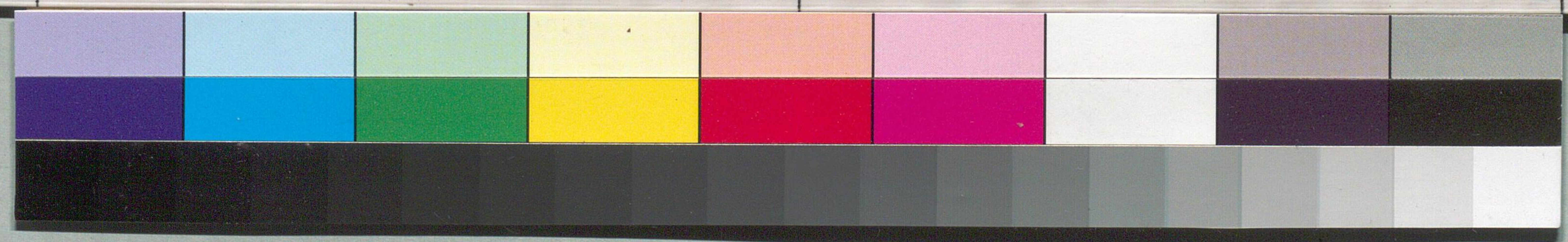
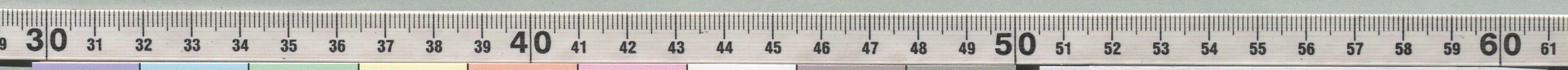




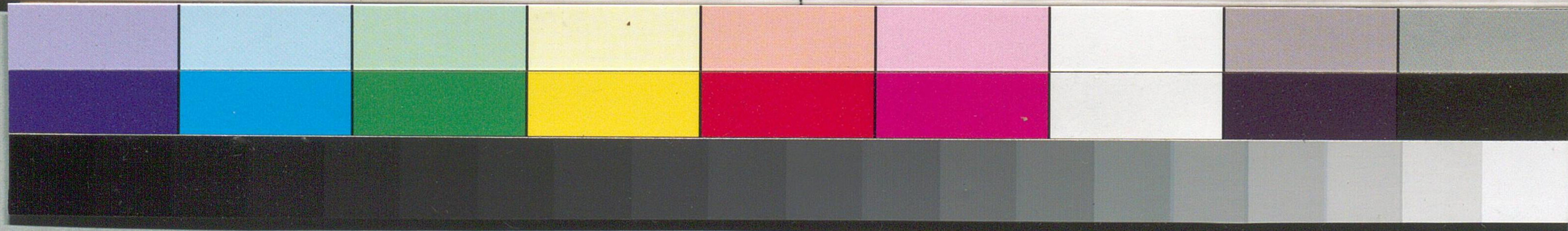
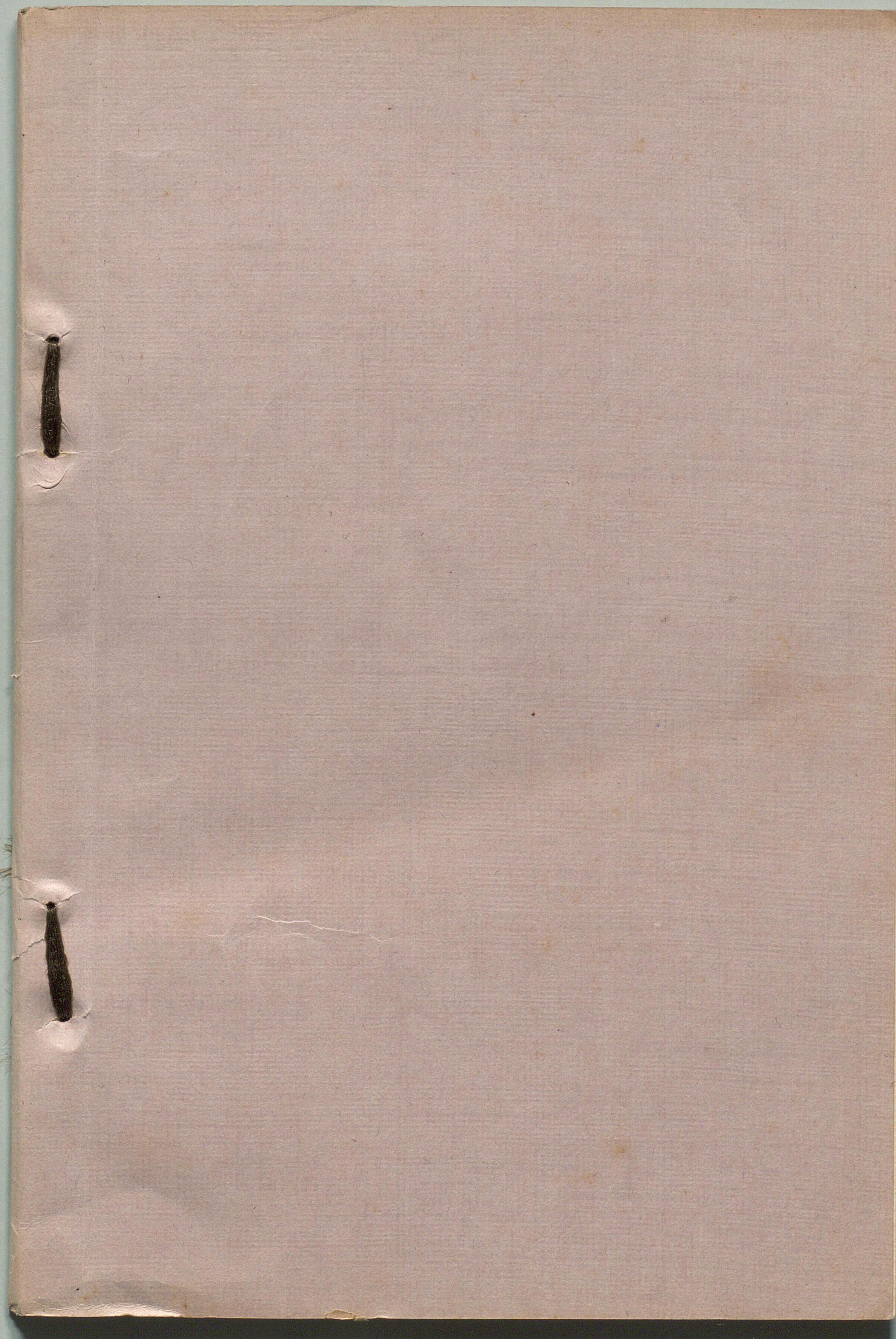


六五十八  
六五十九  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十

六五十八  
六五十九  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十







国立国会図書館 渡辺国武関係文書(その2) 1214